

オペラ・ナンバーのクラヴィーア伴奏版を聴く

野口秀夫

1. 《後宮からの誘拐》から

1.1 序曲

シプリアン・カツァリス (ピアノ)

オペラの初演から 5 か月ほど経った 1782.12.28、モーツァルトはレーオポルト宛の手紙でこう語っている。「ぼくはオペラのクラヴィーア編曲も終えようとしているところです。これは間もなく出版される予定です」。それからさらに 2 年以上経った 1785.3.12、レーオポルトはナンネルに次のように書いている。「《後宮からの誘拐》のクラヴィーア用編曲について私に言えることは、あのトリチェッラが製版しているということだけです。お前の弟が編曲したのですが、まだ完全には終わっていません。多分、第 1 幕だけしか完成していないでしょう。確かめてみます」。完成されたのかどうかは分からないが、1785 にトリチェッラから印刷譜として出版された序曲だけがオーストリア国立図書館に残っている。

1.2 アリア「すばらしい愛の気持は」 K.119 (382h) [82、ヴィーン]

イー・ラン・ニウ (ソプラノ)、スーザン・ゲーデルト (ピアノ) [ユーチューブから]

ケッヒェルは 1771 の作曲としたが、様式的には、モーツァルトのヴィーン時代における初期の作品と思われるため、《後宮からの誘拐》と関連づけられ、アリア「わが感謝を受けたまえ、やさしい保護者よ」K.383 と同時期の作品と見直されている。アロイス・フックスによるクラヴィーア伴奏譜のみで知られているが、元はオーケストラ曲であったと思われる。

Der Liebe himmlisches Gefühl Ist nicht an unsre Macht gebunden. Ein einz'ger Blick entscheidet viel, Noch hat mein Herz ihn nicht gefunden; Ich wart' ich wart' mit Zuversicht. Wenn die Natur mich lieben heisst, Wird dieses Herz schon selbst empfinden. Umsonst beschäftigt sich mein Geist, Nur sie kann Herzen wohl verbinden, Nur sie, die Klugheit kann es nicht	愛の素晴らしい気持ちは、 私たちの力ではどうにもならぬもの。 一度だけの眼差しが沢山のことを決めてしまうが、 私の心はまだそんな眼差しに出会ったことがない。 私は待っている、確信を抱いて待っている。 自然が私に愛せよと命じるなら、 この心はもうそれをおのずから感じることだろう。 私の知力が関わろうとしても無駄だ、 自然だけが心と心とをうまく結びつけるのだ、 自然だけができ、才知にはそれはできぬ。 海老澤敏訳
---	--

2. 《フィガロの結婚》から

2.1 ケルビーノのアリア「自分で自分が分からない」のヴァイオリン／クラヴィーア伴奏版

エディット・マティス (ソプラノ)、エドゥアルト・メルクス (ヴァイオリン)、レオナルド・ホカンソン (ピアノ)
ニューヨーク・ハイネマン財団所有の自筆譜は 6 葉 10 ページに亘る完全なものである。

Non so piu cosa son, cosa faccio, or di foco, ora sono di ghiaccio, ogni donna cangiar di colore, ogni donna mi fa palpar. Solo ai nomi d'amor, di diletto, mi si turba, mi s'altera il petto e a parlare mi sforza d'amore un desio ch'io non posso spiegar. Parlo d'amor vegliando, parlo d'amor sognando, all'acque, all'ombre, ai monti, ai fiori, all'erbe, ai fonti, all'eco, all'aria, ai venti, Che il suon de' vani accenti portano via con se. E se non ho chi mi oda, parlo d'amor con me.	分からないんだ ぼくが何者で 何をしようとしてるのか あるときは炎になり あるときは氷になり すべての女性がぼくの顔色を変え すべての女性にぼくは震える ただその名だけで 愛とか 喜びとかの ぼくは動揺し この心は乱れるんだ そしてぼくにむりやり語らせるんだ 愛のことを 自分でも説明できない欲望が 愛のことを話すんだ 目覚めていても 愛のことを話すんだ 夢を見ていても 水辺に 木陰に 山々に 花たちに 草に 泉に こだまに 空気に 風に でもその空しい言葉は 風と一緒に運び去られてしまう もし誰も聞いてくれる人がいなければ ぼくは愛のことを話すんだ 自分自身に オペラ対訳プロジェクトから
---	---

2.2 スザンナのアリア「私の胸は喜びにおどるの」 K.579 [89.8、ヴィーン]

エディット・マティス (ソプラノ)、レオナルド・ホカンソン (ピアノ)

1789.8.29 に『フィガロ』がウィーンで再上演された時、すでに帰国していたストレース嬢に代ってアドリアーナ・ガブリエリ (モーツァルトはフェッラレーゼ・デル・ペーネと呼んでいる) がスザンナを歌うことになったので、モーツァルトは彼女のために新たに 2 つの曲を追加したのだった。 ロンド「君を愛する人の願いに」 K.577 の方は自作目録に記載されているが、このアリアはなぜか記載されなかった。

この曲が歌われる余地を与えるため、モーツァルトは、スザンナが第2幕でケルビーノに室内用婦人帽を合わせ、淑女の振舞を教えながら歌うアリア「いらっしやい、膝をついてね」を削除した。その代わりに挿入された（挿入場所は特定できない）このアリアは、もとのアリアに比べられるような作品ではないが、それでも抗しがたい魅力があり、モーツァルト自身がすっきりしたピアノ伴奏版を作っているため、しばしば、ピアノ伴奏の歌曲として歌われてきた。

Un moto di gioia Mi sento nel petto Che annunzia diletto In mezzo il timor Speriam che in contento Finisca l'affanno' Non sempre è tiranno Il faro ed amor	喜びの思いが 胸にうずき この苦しい時にあっても 未来の幸せを告げている この悩みも喜びに終ることを 祈りましょう 運命と恋とは いつも横暴とは限らないので 石井宏訳
---	---

3. その他

3.1 アリア「ああ、あなたに明かしたい、おお神よ」K.178 (417e) [83.6、ヴィーン]

ロバータ・アレグザンダー（ソプラノ）、グレン・ウィルソン（フォルテピアノ）

歌詞はアンフォッシのオペラ『余計なお世話（軽はずみな変り者）』（1777 ローマ初演）第1幕からとられたものであり、1783.6.30にヴィーン・ブルク劇場でそのオペラが初演された際にクロリンダ役で出演したアロイージアのために作曲されたアリア「あなたに明かしたい、おお神よ」K.418の下書きと見られ、現在はその直前 K.417e に置かれている。

アンダンテ イ長調、4分の2拍子。カランドラーノ侯爵により貞節を試されたクロリンダが戸惑う。歌唱声部のみ自筆譜が残っている。伴奏は「モーツァルト自身のクラヴィア伴奏版をもとにした」コピーがヴィーン楽友協会にある。

Ah! spiegarti, oh Dio, vorrei Quel desio, che il cor m'affana; Ma la sorte mi condanna A tacer e sospirar. Nol consente il crudo amore, Ch'io mi strugga ad altra face; Del suo barbaro rigore, Conte mio, non ti lagnar.	ああ！あなたに明かしたい、おお、神よ、 あの望み、私の心を苦しめるあの望みを。 でも運命が私をとがめて、 黙って溜息をつかせる。 残酷な愛は許してはくれないの、 ほかのかがり火に身をこがすなど。 そもむごいきびしさを、 伯爵様、嘆かないで下さい。 海老澤敏訳
--	---

3.2 カンツォネッタ「静けさはほほえみつつ」K.152 (210a) [73-75]

白井光子（メッツォソプラノ）、ハルトムート・ヘル（ピアノ）

モーツァルトの死後 1799.2.25 にコンスタンツェがブライトコップ・ウント・ヘルテル社に送った草稿に含まれていて、その後出版されたものの、自筆譜は行方不明となってしまった。

Ridente la calma Nell'alma si desti; Ne resti un segno Di sdegno e timor. Tu vieni frattanto A stringer, mio bene, Le dolci catene Si grate al mio cor.	安らかさが、ほほえみをたたえて 心の中に湧きあがってくる、 腹立たしさや不安の思いは 跡かたもなく消えて行くがいい。 恋人よ、お前がやってくる、 そうこうする間に --- あの甘美な鎖を、こころよく 私の心に締めつけようとして。 西野茂雄訳
--	--

曲はヨーゼフ・ミスリヴェチェック作のアリア「私の愛する人 Il caro mio bene」（1773-74 作曲。パリ音楽院所蔵のアリア集にあり）を編曲したものという説が有力である。このアリアは、また彼のバスティッチョ・オペラ《アルミーダ》（1779 ミラーノ）の第3幕第1場でリナルド役（カストラート）によっても歌われる。現代では、当オペラがリスボンにてアジューダ図書館所蔵のスコアにより 2015.5.22 に半舞台形式で蘇演され、さらに、当アリアは K.152 と共に 2015.7.23 にグラーツのヘルムート・リスト・ホールにてヴァレル・サバドゥス（カウンター・テナー）、ミハエル・ホフシュテッター指揮のグラーツ大管弦楽団によって演奏されている（録音は無い）。

Il caro mio bene Attendo, sospiro, Ne quanto qui miro Conforto mi dà. San l'aura, san l'onde L'acerbe mie pene, Ne sò chi m'asconde L'amata, pietà!	私の愛する人 私は彼女を待ち、彼女にため息をつき、 そして私が見るものは何も 私に慰めを与えることができない。 順風よ、好調の波よ 私は苦い苦しみにいる。 私は知ってしまったーああ、お慈悲をー 誰が私から最愛の人を隠したのか！ 野口秀夫訳
--	---

（2019年11月29日作成、2020年11月21日改訂）